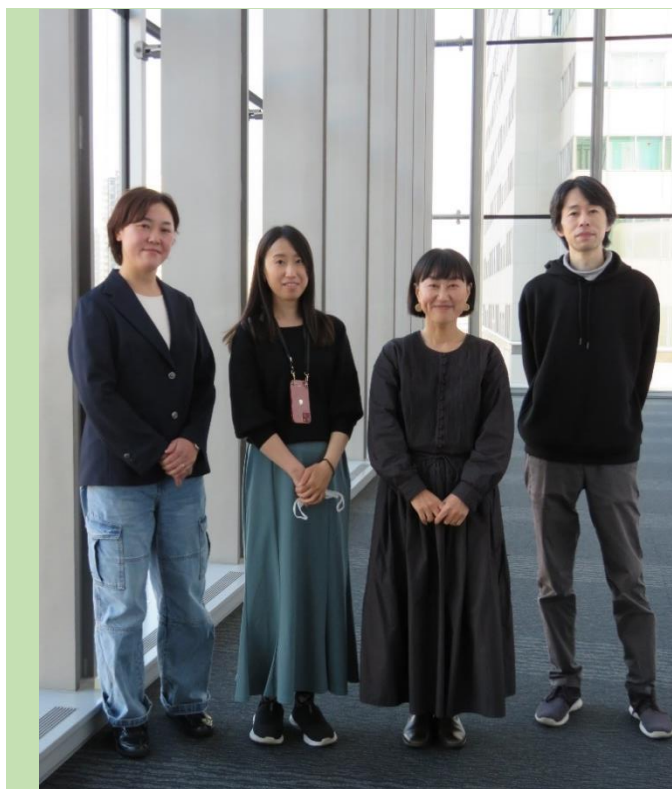


いわて復興応援隊
インタビュー

いわて復興応援隊インタビュー【盛岡編】



-左から-

峠館 絵里さん(旧姓:田村・雫石町在住)
活動期間:2013年4月15日~2023年3月31日
配置先:田野畑村産業開発公社
三陸総合復興準備室
(公財)さんりく基金DMO事業部(三陸DMOセンター)

及川 理香子さん(盛岡市在住)
活動期間:2020年4月1日~2023年3月31日
配置先:岩手県ふるさと復興部県北・沿岸復興室

佐藤 有子さん(盛岡市在住)
活動期間:2017年4月1日~2020年3月31日
配置先:三陸防災復興プロジェクト2019推進室

真部 涉さん(盛岡市在住)
活動期間:2018年6月8日~2019年8月31日
配置先:三陸防災復興プロジェクト2019推進室

インタビュー場所:いわて県民情報交流センター「アイーナ」

— ご多忙の中お時間いただきましてありがとうございます。まずは皆さんの近況をお聞かせください。

(佐藤) 応援隊を辞めてから3年になるんですね。

今は(株)PUBLIQ という会社に所属して、公民連携事業を行っています。2017年の都市公園法改正が契機となり始まった Park-PFI 制度(※)などを活用し、行政と連携して都市公園経営に取り組んでいます。紫波町のオガールが先進事例として全国的に注目されていますが、弊社が参画する盛岡市中央公園でも年間30組程度の視察を受け入れていて、遠くは宮崎や沖縄など県内外からお越しいただいています。

※ Park-PFI: 公募設置管理制度。公園に施設を設置して運営する民間事業者を公募により選定する制度。



(真部)



プロジェクトの終了後まもなく、応援隊を辞めて盛岡で起業しました。立ち上げ当初は、地域の経営課題を解決するコンサルタントのような会社で、潰れかかった英語塾の立て直しや、青森の方で学生のスタートアップを支援したりしていましたが、気がついたら自分で塾を経営するはめになっていて。

なんかご縁があって盛岡で高校生が幅広い選択肢をもって勉強して欲しい、様々な選択肢を持って欲しいという事を目指して運営しています。キャリア形成を目的として、生徒がやりたいことを伸ばしてあげたいと思っていますので、受験塾ではありませんとは言っています。

それにプラスして、いわて地域おこし協力隊ネットワークの理事をやっていて、理事の多くは協力隊経験者なのですが、応援隊(復興支援員)の経験はちょっと色が違うので、また違う視点で見られるのではないかと考えています。

(及川) 私は以前にも携わっていた土木関係の仕事に戻ったような形です。
測量をしたり図面を書いたりする仕事で、今は主に山に行き、舗装道路を作るために必要な材料の計算をするための測量を行っています。鉋と測量道具をもって、道路から外れた藪の中にずんずん入っていくんですよ。虫とか熊とか怖いんですけど、なかなかできない経験なので、今のところは楽しくやっています。
実は、応援隊時代にポスターやパンフレットで協力させていただいた方々から、今年もどうですか？と数件お声がけがあったんですが、こういう仕事なので締切などの確約ができず、お断りしたのが申し訳なかったという感じです。
応援隊を終えてからも、急に海が見たくなったり、美味しいものを食べたくなったりして、休日沿岸方面に車を飛ばしたりしています。



一 峠館さんは、応援隊として 10 年の活動をやり切りましたね。



はい 10 年ですよ。
応援隊の最終任期を県から伝えられてから、この次はどうしようかなと思って就活していたんですが、ここのアイーナ 5 階の環境学習交流センターを運営している環境パートナーシップいわてというNPOにお世話になっています。
主な担当は、温暖化防止いわて県民会議が設置している「いわてわんこ節電所」というサイトの運営、環境学習交流センターのwebサイト内の、いわて環境情報板の情報収集や、新設した先進企業取材レポートのコーナーを担当していて、県内の環境先進企業に取材して記事を書いています。
今の業務は、応援隊時代に担当した「さんりく旅するべ」(※1)の取材や編集の経験が存分に活かされていると思っています。

※1 さんりく旅するべ: 三陸 DMO センターが運営する三陸の観光サイト

一 応援隊に応募するきっかけについてお聞きします。このメンバーでは当時の記憶が一番新しい及川さんから伺います。

(及川) 私は、応援隊の前は三陸防災復興プロジェクト2019(※2)の事務局に採用された県の臨時職員で、その任用期間が終わる頃に、応援隊として活動しないかと声をかけていただきました。
臨時職員の時も応援隊の時も志望動機は同じですが、まず自分の親族が三陸に所縁があるということで、機会があれば三陸復興に関わる仕事をしたいと思っていたことと、また震災の頃、自分は県外に居たため、震災についてきちんと知りたいと思っていたことが大きいです。臨時職員から応援隊に変わる時は、応援隊ならもっと深く関われるという期待が強くなったことを覚えています。



※2 三陸防災復興プロジェクト 2019

岩手県沿岸 13 市町村で開催され、復興に取り組む地域の姿や三陸地域の魅力を発信したイベント。これにより生みだされる効果や三陸の魅力を継続して発信するためその後もプロジェクトとして継続されている。

(真部) 私は、ちょっと記憶が曖昧で…震災の時は、前の会社で札幌にいました。会社でもかなりの被害を受けていて、視察に行った同僚から状況は聞いていて、その話はどこか心の片隅にあったと思います。あるところで、次のステップにチャレンジしてみたいなど考えていた時にそのことを思い出して、それまで何の縁もなかった“東北”で検索をしていた時に、ちょうどタイミングよく岩手から応援隊につながったと記憶しています。

一 応援隊のイメージと実際の活動との間にギャップというのは感じませんでしたか？

(真部) どちらかというとミッション型で課題を与えられていたので、ギャップは感じませんでした。そばに先輩隊員の佐藤さんや阿久津さん(宮古市配置)が居たのが心強かったのと、職場の県の方々が本当に良くしてくれました。活動が進むにつれて、ジオやDMOなど様々な活動に取り組んでいることを知ったので、比較的スムーズに入っていけたと思います。

一 佐藤さんは、応援隊前は香川でお仕事されていたんですね。

(佐藤) 香川県の瀬戸内国際芸術祭の実行委員会にいたんですが、2016年の閉会直前に、岩手県の観光コーディネーターの方と県職員の方が視察にいられて、一緒に話をする機会があったんです。芸術祭が終わったら私は岩手に帰る予定だということ話をしたときに、震災から10年という節目を前に、三陸沿岸一帯を会場とした事業構想があるというお話を伺いました。

震災の頃は盛岡に居てボランティアも経験していましたが、お二人から事業開催の目的や三陸の今後の話などを伺って、大事な事業だなと思いました。その時点では、応援隊の詳しいことは聞いていませんでしたが、事業に参画する一員となるため、応募することになりました。

採用後1年間は、マリオスの事業準備室で応援隊3名と県職員合わせて10名程度の少人数体制で、事業内容の検討などをしていました。事前調査ということで頻りに三陸に通い、被災・復興の状況や地域の文化などを学びました。事業概要や中身がなかなか決まらず不安もありましたが、「三陸防災復興プロジェクト2019」の開催が発表されると、事務局が盛岡合同庁舎に開設され、メンバーが倍以上に増えて新体制となり、本格的に事業推進に臨むことになりました。



瀬戸内国際芸術祭: 瀬戸内海の島々を舞台に、現代芸術や建築、音楽、パフォーマンスなどの作品を展示する国際的芸術イベント。2010年から3年に一度、春・夏・秋の3つのシーズンにわかれ開催される。佐藤有子さんは、2013年、2016年の開催に関わった。

一 峠館さんは、2013年4月着任の応援隊2期生ですが、応募されたきっかけなど覚えていますか？

(峠館) いや〜10年長いですね。震災の時は東京にいて広告代理店に勤めていました。職場のモニターに映し出された津波の映像を見て「これって岩手のこと」とショックを受け、どうにかしたいと悶々としながら、行動に移せない日々が続いていました。

ある時、東京・銀座のいわて銀河プラザで「いわて復興応援隊募集」のチラシを見て興味が湧き、有楽町のふるさと回帰支援センターでの説明会に行きました。その説明会で、すでに活動している首都圏出身の応援隊3人の活動紹介をしている姿がとてもキラキラしてました。

県外出身の隊員が、岩手の被災支援についてこんなに熱く語っているのを、岩手出身の自分が聞いているということが何か不思議で、ものすごい刺激を受けました。応援隊の話を知りまでは、岩手へのUターンまでは考えていませんでしたが、彼らのオーラに圧倒されて「いいな、応援隊に入りたいな」って思いました。

いわて復興応援隊 セミナー&募集説明会

募集説明会の入場は自由ですが、事前のお申し込みをお勧めします。 ☎019-629-5194 ☎40007@pref.iwate.jp

開催日時 平成25年 1月19日(土)	開催日時 平成25年 1月25日(金)
●10:00-16:00(15分休憩) マリオス183、184会議室 〒020-8570 ☎019-621-5000	●10:00-16:00(15分休憩) ふるさと回帰支援センター 〒03-6273-4401 ※受付は10:00-15:00(15分休憩)までです。
開催日時 平成25年 1月26日(土)	
●10:00-16:00(15分休憩) 若手県政推進事務所分室 〒020-8570 ☎03-5212-9162	

●プログラム

- いわて復興応援隊の取り組みについて
- 岩手県復興推進協議会の活動状況
- 平成24年度復興推進協議会の活動状況
- 平成25年度復興推進協議会の活動について

いわて定住・交流促進連絡協議会 (若手県庁地域振興室内)
〒020-8570 若手県政推進事務所内丸10-1 ☎019-629-5194 Mail:AB0007@pref.iwate.jp

都内において、2013年1月25日と26日の両日、「いわて復興応援隊セミナー&募集説明会」を開催。会場では、応援隊1期生の菅原久美子隊員(陸前高田市配置)、宮本慶子隊員(洋野町配置)、町田恵太郎隊員(野田村配置)がそれぞれの活動についてプレゼンを行った。

一 これまでの活動の中で最も印象に残る活動や経験について伺います。

(及川)



私がメインでやっていたのは、三陸防災復興プロジェクトの web サイトの更新や、SNS による三陸の情報発信だったんですけど、正直、最も印象深いのは応援隊の田川さん(宮古市配置)の「明日の浜人発掘事業」のお手伝いですね。正直それまで私が行っていた情報発信の業務は盛岡の事務所に居ても最低限のことはできるものだったんですが、浜人事業は県立宮古水産高校の PR を支援するため、田川さんに付いて現地を回り、授業の様子を見させてもらったり、実習船を見せてもらったり、生徒の話を生で聞いたりしました。

話を聞いてみると、「親が漁師だから水産高校に入った」という生徒から、漁師という職業をピンポイントで選んで県外から宮古に来たという生徒まで、いろんな立場の子たちが混ざり合って学ぶ、環境の多様な価値観と自由度に驚きました。半年くらいの間でしたが、この事業に関われたことで、表面的な情報発信から地域に触れて情報を掘り下げる大切さを改めて感じ、自分にとっては仕事のやり方を見直す転換期になったと思います。

自分にとっては仕事のやり方を見直す転換期になったと思います。

「明日の浜人発掘事業」:水産業に携わる人材の発掘を目的に将来を担う中学生に職業の選択のひとつとして水産業への理解を深めてもらうことを目的に県宮古水産振興センターが県立宮古水産高校との連携で実施する事業。



(真部)

佐藤さんと文化・芸術という分野に知見があり、阿久津さんは鉄道に詳しいとか、それぞれ力が発揮できると思いますが、自分にはそのような素地がなく、ジオ関係の展示とかフォトゲイニングの運営とか、これまでの人生ではまるで関心がなく強みもない分野を担当したんです。

自分の性格上、知らないとかいやだと思うことはあっても、やらないという選択肢はなくて、とりあえずやってみて、何か面白そうなポイントを見つけるところはありまして、結果として「自分はこういうことに興味があったんだ！」と意外な気づきがあったことが印象に残っています。プラタモリを見て 10 年前の私ならそんなこと興味なかったはずなのに「タモさん、凄い！」とか言っている自分がいます(笑)

フォトゲイニング:地図をもとに時間内にチェックポイントを回り得点を集めるスポーツ。チェックポイントでは見本と同じ写真を撮影し、チームメンバー全員が写るようにする。2019年6月15日、岩手県沿岸地域で初開催となる「三陸ジオパークフォトゲイニングフェスティバル」が開催された。



(佐藤)



三陸防災復興プロジェクト 2019 さんりく文化芸術祭で上映のオペラ「四次元の賢治—完結編—より

私は、三プロで文化芸術事業を担当させてもらいましたが、地元住民の方との直接的な交流はあまりなく、オペラ公演の受託事業者さんと関係先との調整をしながら、無事に成功することに集中していた気がします。公演後、涙していた方や、客席からの感想を聞いて、地元のみなさんの心に届いたと胸が熱くなりました。

三プロに関わって、国連防災機関(UNDRR)の方や音楽プロデューサー小林武史さんなど、日本の第一線で活躍される方々とお会い出来たことも嬉しかったですが、それ以上に、このプロジェクトを成功させるべく、一丸となってチームを創り上げ事業を完遂した推進室の皆さんの仕事ぶりや、課題に向き合い事業を推進していく姿勢に感銘を受けたりと、身近にいた上司や仲間たちの姿が印象に残っています。

一 これまでの活動の中で最も印象に残る活動や経験について伺います。

(峠館) いろいろありますが、プランナー養成塾(※)とかは、様々なところに行かせていただき、多くの体験もさせていただきました。体験取材して、文書にして人に伝える楽しさを学べて、今の仕事にもつながっていることがありがたいです。

※ 三陸観光プランナー養成塾

三陸DMOセンター(さんりく基金 DMO 事業部)が三陸沿岸地域の豊かな自然・食材の恵み・郷土文化等を生かした体験プログラム等の企画を担う人材育成を目的に実施する研修プログラム。

それとも一つ、応援隊時代の重要な出来事は、ずっと一緒に歩んできた相棒のことで、田野畑では仮設住宅に住まわせてもらっていたんですが、そこで出会った猫です。出会ったときにすごく人馴れしていたので、多分、他の入居者の方が、出られる時に手放さざるを得なかったんじゃないかと推測したんですが、いたずらでおやつをあげたら、ほぼ毎日自宅前に顔を出すようになって。回りに相談したら“しかたないね”ということで、ちょっと遠くの山の方に置いてきてくれたんですけど、10日くらいしたら、入口から可愛い声がして・・・これは運命だと家族になりました。遠くに置いちゃったことの凄くすごく反省しました！田野畑から盛岡への異動の際も一緒に矢巾の実家で暮らし、結婚して今住んでいる雫石でも元気に家族しています。



一 皆さんは、三陸沿岸地域のこれからについて、こうなって欲しいなという思いがありますか？

(佐藤) プロが終わって、自分にとっての応援隊の活動も終わり、沿岸に行く機会が減りましたが、もっと多くの人に三陸の良さを知ってもらいたいし、沿岸のみなさんが穏やかに過ごす日常が続くよう願っています。それと沿岸に限らずですが、最近では全国で若手の首長などの活躍を目にする機会が増えたので、県内でも新たな時代の感性で街づくりを行うリーダーの誕生に期待します。

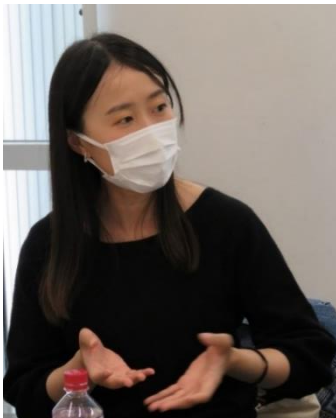
以前生活した香川の人とは今も交流があって、もうひとつの故郷のように思っています。香川の友人を三陸に案内したり、洋野町のウニなど美味しいものを送り合ったりして楽しんでいるんですよ。沿岸との交流もずっと続いていくと良いなと思います。

(真部) 今は、沿岸に仕事で関わることはないんですが、札幌にいたときの知り合いが、三陸に行くというのでルートとか見るべきところとかアドバイスできたので、これは活動で得た知識を使っているなと感じます。岩手から東京への土産とかも沿岸のものという選択が出てきますね。

これまでも全国点々と仕事していますが、住めば都という方なので、住み難さとか感じないのと、長野と岩手(盛岡)は似ているところが多いので、ネイティブな言葉で困ることはありませんけど全然苦にはなりません。今、塾やっていますが、商売という感覚より、それがきっかけでどう岩手に還元できるかという視点でやっています。

今年東大に合格した学生をスタッフとして雇っているんですが、彼が持っているノウハウを高校の後輩達に還元して地域格差をなくす取組をしてもらっています。医者が少ないなら医学部へ、そのもっと前に医学部を目指すという身近な先輩がロールモデルになって子供たちが後に続く、そういう人づくりの取組を、教育業を通してやっていきたいと思っています。各地で仕事してきて断言できますが、岩手の子たちは能力が高くて真面目、素直だし伸びます。情報格差的な機会均等の問題があるとは思いますが、今はオンラインも活用できるし、十分期待できます。

(及川)



陸前高田に親族が住んでいるので、高田の街を見る機会があるんですけど、思っていたより人の戻りが少ないなと感じます。ハード整備はほぼ終わり、中心市街地も出て、公園には若い夫婦や子供がいっぱい溢れているのに、視線をずらすと空き家がいっぱいで不思議な気持ちになります。きれいな街なだけけど、無機質というか、ホントはもっと賑やかになる予定だったんだろうなと。

なので、非現実的な意見というのは承知で、水産系、海洋系に特化したキッズニア的な、そういう土地ならではの生業に触れられる施設が作れたらなって思ったりします。先ほど話した明日の浜人での体験のように、子供の時から水産業に触れられる機会があったら、私も土木じゃなくて水産を選んでいたかもしれません。楽しんで水産業に触れられる唯一無二の施設みたいなのが沿岸地域にあればなと思います。

(峠館) ああなって欲しいとかこうなって欲しいという願いより、自分がどのようなスタンスで仕事したいかが重要だと考えているんです。SNS上では表向きはキラキラしているんですが、その裏側や後側にどのような問題があって、どのように解決すればいいのかが大事にしたいと思っています。企業に取材に行くと、一見地味ですが結構すばらしい取組みがあって、うちの NPO でも、堅実に環境問題に取り組んでいる企業を紹介しようということで、自分も率先して調べながらやっていきたいと考えています。

地域というより、行政の皆さんにお考えいただきたいのは、数字とか表面的にいいところだけでなく、数字は低くても質は良い場合もあったり、数字は良さそうに見えても失敗だったり、ダメだったりすることももっと共有して見せていくことも大事だと思うんです。

キラキラしたことばかりじゃなく、地味でも小さくてもいいものを引き出すこと、そういう支援をアンテナ高くしてやってもらえたらなと思います。私も今の仕事でそういう姿勢で臨むようにしています。



一 応援隊を経験して良かったですか？

(峠館) 取材力やカメラの撮影の技を活動の中で学べたこととか良かったですね。今の仕事にどんどん生かしていきたいですし、三陸復興支援から今度は岩手の環境づくりに貢献できるようがんばります。

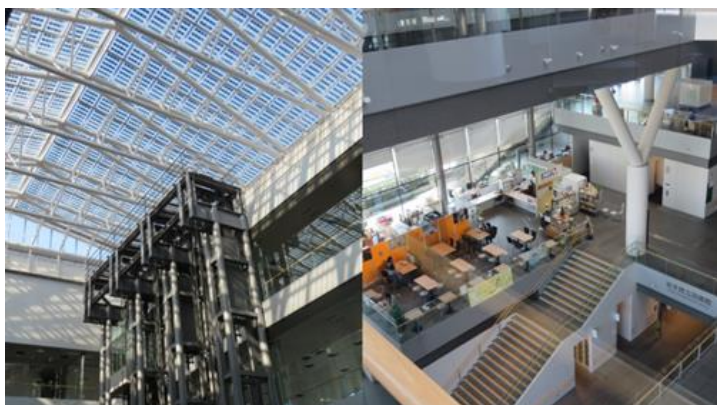
(及川) まず志望動機でもあった、震災について知りたいが叶えられたのが一番です。隊員になっていなかったら、こんなに積極的に震災に関するシンポジウムを聞いたり、イベントに出たり、防災について考えることはなかったと正直思います。震災だけではなく、地域のお祭りや歴史、文化、伝統、それに関わる人の想いなどにも触れられたのが、本当に良い経験でした。今の仕事には災害時の測量というのがあり、出動する可能性もあるので、そうしたら応援隊時代の経験で、少しは被災地に寄り添った動きができるのかなと思います。ちょっと、こじつけみたいですけど。

(真部) 応援隊として活動することがなければ、おそらく踏み込めなかったであろう分野に関わることができたことで、いろんなことを許容する柔軟性がついたかなと思います。キャリアとしてはすごく良い時期を過ごしたと思います。

(佐藤) 応援隊の活動を通じて、たくさんの素敵な人たちに出会えたのが財産で、専門支援員のみなさんをはじめ、職場のみなさんにも助けてもらいながら、良い経験を積むことが出来ました。これからも、このご縁を大事にしたいなと思っています。



いわて県民情報交流センター「アイーナ」 (岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1)



アイーナは、いわて復興応援隊の募集説明会や活動報告会、復興支援員・地域おこし協力隊の合同研修会などにこれまで数多く使用してきた県の交流施設です。

県立図書館や多目的ホール、盛岡免許センターのほか、岩手県立大学アイーナキャンパス、子育てサポートセンター、高齢者活動交流プラザ、青少年活動交流センター、男女共同参画センター、国際交流センター、NPO 活動交流センター等も設置されています。

元応援隊の峠館さんが活動する環境学習交流センターは、建物の5階にあります。

いわて復興応援隊インタビュー【宮古編】



【左】

阿部 智子さん(大槌町在住)
活動期間:2020年8月18日~2023年3月31日
配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局(宮古市)

【右】

田川 深青さん(宮古市在住)
活動期間:2020年8月18日~2023年3月31日
配置先:県沿岸広域振興局宮古地域振興センター
(連携先:同水産振興センター)

インタビュー場所:宮古市・イーストピアみやこ



— 阿部さんは、応援隊の任期終了後も引き続き三陸ジオパーク推進協議会の事務局員として活動されていますが、業務内容とか変わったこととかありますか？

(阿部) 応援隊の任期が終了して、引き続き三陸ジオパーク推進協議会の直接雇用でお世話になっています。基本的には同じ業務ですが、今年度は文化庁等が進めている2025年日本国際博覧会という事業にも関わっています。昨年度、釜石で開催したジオタウンのイベントの経験が今年の活動のベースになっています。企画から運営までほぼ任されていて、当時の応援隊仲間との連携プレーを思い出しながら進めています。今年度は、事務局長はそのままで、事務局のメンバーも1人異動されましたが、地質の専門員の方が入ったので、ある意味凄く安心感があります。

— 田川さんは、子育て真っ最中ですが、郷土芸能の指導は今もされているのですか？

(田川) 岩泉高校の中野七頭舞のコーチ(※1)は、引き続きやらせて頂いていて、新型コロナが5類になってからは子連れOKになったので、子連れで毎週通っています。

— 改めて、応援隊になる時のきっかけや応募動機を教えてください。

(阿部) 当時働き口を探していたので、求人を見かけて応募しました。年齢的に近所のパートしかないなって思って半ばあきらめていたのですが、ちゃんと月の給料がもらえて、社会保険があるというのが一番でした。資格も何もない私ですが、でもやれそうかなっていう、そんな感じがあったのが正直最初の動機です。



確か、当時の応援隊募集は4つの事業があって、私はこれという希望はなくて「どれでもいいので採用してください！」みたいな感じで応募したんです。ジオパークは聞いたことはあるけど、全然理解していない状態から活動が始まりました。

(田川) 私の場合、ちょうど宮古に移住してきたばかりで、地域活動に関心があったので地域おこし協力隊をやるうかなって思っていたのですが、宮古の振興局に知り合いがいて、「それなら県が募集している復興支援員に応募して」とお誘い頂いたのが経緯です。復興と地域に関わる仕事ができるというので応募を決めました。

復興支援って、行政単位で様々あると思うのですが、パッと見たときに一般の人にはわかりにくいですね。自分でも復興に関わるなんて思っていなかったのが、復興というより地域活動をしたいという感じでした。



一 応援隊の活動は、イメージしていた通りでしたか？

(阿部) ジオパークって何だろう？から始まって、先輩隊員の林さん(三陸ジオパーク推進協議会配置)と地域を回って歩いて、「あれもジオだ、これもジオだ」っていろんな事がわかったのが、凄く助かりましたね。元々、自分は(地域の)外から来た人間なので、地域づくりには、その地域資源を活用すれば良いというように、単純に客観的に見られたんじゃないかなって思っています。地域おこし協力隊の皆さんが、そのような目線で活動・活躍することの意味も凄くわかります。

(田川) 実際の活動は自分のイメージとのギャップしかなかったです。何をしたらよいのかわからなかった。最初、私が持っていたイメージは、地域おこし協力隊の方に近かったのが、自分で動いていいのだと思っていたんですが、それが自分では動くなされてから全部が躓いてしまい、ただただ時間をつぶしているようで、人生がもったいないのではないかなと思うようになっていました。

一 受入先と具体的にこうやっていこうよと対話するとか相談する機会はなかったですか？

(田川) 残念ですが全くなかったです。そもそも受入先の方も「応援隊って何？」って感じで、県の仕事は任せちゃいけないし、仕事の一部をしてもらって補助職員でもないし、何をしてくれるのかもわからないし、こっちもどこまでやっていいかわからない。そうして何にも出来なくなってしまう…(先述した)応援隊のお誘いをくださった方に相談したら、「そうだよ、それならもっと一緒に外に行こう！」と言って下さったんですけど、その直後にその方が異動になってしまっ…。その後は自分の出来ることをと頑張ったのですが、例えば県事業は SNS 発信ひとつとっても、その都度決裁が必要であるとか、制約も多かった。でも SNS については自分のほうが県の人よりはわかることが多かったのが、そこは重宝されましたけど、一日中 SNS をやっているわけでもないで…。



一 阿部さんは、三陸ジオパークの活動で一番印象の深い出来事ってなんですか？

(阿部) やっぱりイオンタウン釜石で開催したジオタウンでしょうね。とにかく「ジオパークで楽しいイベントをやりたい」と思うところから始まったのですが、いろいろと欲張りすぎていたようで、準備もとても大変でした。


本当に短期間で企画から準備、当日の運営までやり遂げられたのは、応援隊でジオパーク現地推進員でもある町田さん(久慈市配置)、里館さん(宮古市配置)、菊池さん(釜石市配置)、それから及川理香子さ(盛岡市配置)、皆さんがいたからこそできたと思っています。

一 田川さんは、自分の活動で印書深い活動は何ですか？

(田川) 「宮古の真鱈」ブランド化事業関係(※2)ですかね。応援隊にお誘い頂いた知り合いの方とペアになった仕事で、結構勝手に動かしてもらえました。グルメフェアの参加店にお店にインタビューしたことを SNS で発信してみたら、お店の方も喜んでくださったんです。地元の方の声を表面的ではなく、こういう思いでお店をやっているとか、きちんと発信することが大切なのだと思います。最後の真鱈祭りでは、宮古市役所の方と連携してお手伝いできるというのも面白かったですね。

(ここで、お子さんに我慢の限界が来てしまい、ご機嫌が急降下。田川さんへのインタビューはここで終了となりました)

一 阿部さんはジオパークを知って、自分的に何か変わりましたか？

(阿部)  応援隊にならなかつたら、ジオパークにもここまで関わることはなかったと考えていくと、自分の意識は変わったと思います。地域とジオを繋げられるガイドさんが各地にはいても、行政の方にもっと増えないと繋がらない。ジオパークをやっていくのであれば、各分野でその(ジオパークの)観点がわかる人がそれぞれの地域に増えていかないと、多分厳しいだろうと思っています。

郷土芸能ともジオは繋っていて、虎舞とか獅子踊りは江戸時代に房州(千葉)から当時物流と一緒に伝わった歴史があると聞いていましたが、それが可能となったのは、三陸の特徴的な地形のため。交易に最適で良好な港があり、各地にそれぞれの文化が育まれる環境にあったという話で、三陸の郷土芸能は世界から注目されるほど各地に沢山あるということをジオパークで学びました。

一 これから先の三陸の復興や地域の暮らしはどうなって欲しいと思いますか？

(阿部) 基準は人それぞれなので何とも言えませんが、大植を例にすれば、家は増えてはいないし空き地はそのまま。でもそれは仕方ないことですよね。なんとというか、量より質・かなって思うんです。人口が減るのは、もう大植だけじゃなくて三陸全体だし、日本全体の問題ですよね。暮らしていくのに困らなければいいぐらいにしか思っていないくて、その中で人との関わりで豊かな時間ができれば、それが一番かなと思います。

地元で高校まではあるけど、その先の進学となったら盛岡や仙台とかになる。だから子供たちは、一度は地元を出て行くことになるけど、出てみて地元の良さを分かるんじゃないかなと。地方はどこも同じような課題があると思うので、地域の魅力を自分達ももっと気づこうよってとても思っていて、その度に(地域おこし協力隊や IJ ターンで)外から人が来て地域の人に関わるというのは、良いきっかけになっていると思います。(ジオパークの活動も同じことにつながるので)やっぱりそこに私は行き着きますね。

※1 東京都出身の田川さんは、中学生の時に民族舞踊を見て中野七頭舞(岩泉町)や黒森神楽(宮古市)に出会い、師匠について舞を学び、結婚を機に岩手に移住してからは、岩泉高校郷土芸能同好会に中野七頭舞の指導をしており、応援隊任期中も地域支援活動として継続し、岩泉高校は、2021年10月「第44回岩手県高校総合文化祭郷土芸能発表会」において、優秀賞一席に選ばれ、来年の全国大会出場を果たした。

※2 「宮古の真鱈グルメフェア」は、全国有数の水揚げ・抜群の高品質を誇る「宮古の真鱈」のオリジナルメニューが沿岸をはじめ県内のフェア参加店で味わえるイベント。期間は例年12月初旬から1月末で、主催は岩手県沿岸広域振興局水産部。関連イベントとして、宮古市の「宮古真鱈まつり」(主催:同実行委員会)が、宮古市魚市場特設会場で1月に開催される。



いわて復興応援隊インタビュー【大船渡編】



【左】

中野 貴之さん(大船渡市在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:一般社団法人大船渡市観光物産協会

【右】

佐藤 秀則さん(陸前高田市在住)

活動期間:2013年4月15日~2017年3月31日

配置先:NPO法人夢ネット大船渡

インタビュー場所:

大船渡市防災観光交流センター「おおふなぼーと」



一 応援隊任期中は、お二人とも大船渡市を拠点に活動されましたが、現在のお仕事など近況をお聞かせください。

(中野) 応援隊終了後、そのまま受入先の大船渡市観光物産協会にお世話になり、当初は嘱託職員の身分でしたが、その後、正職員となって3年目になります。

勤務先は協会本部で、観光客誘致拡大事業の国内担当として、営業職を仰せつかっています。人と話すことをあまり得意としない自分が、営業という立場になったのも不思議な話ですが、関わりの薄い関東や関西方面へ商談会等で出張に出かけたり、担当する別事業「大船渡さんま焼き師認定試験(※1)」の関係から、長崎県から要請を受け、世界で唯一の資格である「さんま焼師」の一人として、さんまを焼いたりしています。大好評だった「三陸・大船渡東京タワーさんままつり」は令和2年に終了しましたが、令和4年からは有志が集まり、代替イベント「大船渡さんまDAY」が開催されています。このほか、私自身が関わったイベントとして、盛岡市のオーロパークにて「さんまの炭火焼コーナー」を市内水産業者の要請で出展しましたが、600匹用意したサンマが開場とほぼ同時になくなりました。

(佐藤)



応援隊の活動終了後、ご縁があつて陸前高田市の職員に応募したところ、短期の臨時的な職員と思っていたら納税に関する任期付きの職員ということで、今年度で6年目になります。

はじめは政策推進室でふるさ納税を担当していて何もわからない状態。次はまちづくり戦略室への異動でしたが、そのままふるさと納税を継続して担当しました。

長く民間にいた自分に何が出来るかと考えましたが、とりあえず仕事の効率化を提案し実行することに努めました。

一 応援隊に応募したきっかけは何ですか？

(中野) 応援隊になる前は、兄貴と二人で看板製作関係の会社をやっていたんですが、震災の影響もあつて業績も苦しくなつたので新しい仕事を探していたところ、アイーナ(盛岡)の図書館で、応援隊の募集チラシを見たんです。震災後、ボランティアの経験はあったんですが、特に現地で役立つような何か特技とか資格もなかったの、自分では無理かなと思っていたら募集要項に“ガイドの会”という文字が目とまったんです。

昔、バックパッキングで南米パタゴニアの大氷河に行った時に、素晴らしいガイドに出会ったことがあつて、大自然のパノラマも素晴らしかったのですが、ガイドの演出で感動が増幅した経験が忘れられず、それもあつて観光には興味があつたんです。決してガイドになろうとしたわけではありませんが、ガイドの事務局ということで観光に携われたらという思いで応募しました。

(佐藤) 私は、震災のちょうど1年前に会社を早期退職して独立していたんですが、震災が起きてからは、大船渡や陸前高田に盛岡から支援物資を運んでいました。父が銀行員で、自分が転勤先の大船渡小学校出身ということで土地勘もあり、以前の職場の後輩がいたので、まず彼らの安否を知りたいのと物資を運びたいということで、アピオから物資を受け取り半年間続けました。

元々起業を計画していたので、起業支援制度に応募して支援金200万円を元手に大船渡で起業しようと思っていたんですが、応募直前に、担当者から起業を志している方たちのアドバイザーになってもらえないかと声がかかり、希望エリアも選べたので1年間その仕事に就きました。次はどうしようかと考えていたところ、起業支援の担当者から岩手県で復興支援員を募集しているみたいだと紹介されたんです。決め手になったのは、起業支援という項目が募集要項にあったことで、面接の時に、起業支援を念頭に入れていた受入先の方がその場におられたんです。

前職の経験がなければ、応援隊になることもなかったと思います。

一 応援隊の活動の中で、印象に残るものはありますか？ 三陸鉄道の企画列車も凄い人気で記憶に残っています。

(佐藤)



復興工事で来ている工事関係の方の、息抜き場(飲み屋)がないという声が聞こえてきて、いろいろ模索していたところ、当時、受入先の夢ネットが三鉄の盛駅の管理を任されていた関係で、三鉄を使えば何かできるかなと思ったんです。早速三陸鉄道に出向いて相談したところ、列車の貸切は可能だということになり、列車であれば酒を飲むのも食べるのもいいはず、と思いついたのがキッカケでした。

酒については、応援隊の平山さん(陸前高田市配置)経由で「県北の隊員から葛巻ワインさんが被災地で何か支援できることはないか検討している」という情報が入り、それならダメもとで交渉してみようと、大雪の中、葛巻に行って、企画を説明してワインを提供していただきたいとお願いしたところ、それなら飲み放題でやろうということになって「ワイン列車」が実現したんです。イベントは大盛況で、次は日本酒、次はビールとなり、地元ビールメーカーでは、実は話が来るのを待っていたと快く協力いただいたんです。お酒以外にも車内用の弁当など大船渡だけでなく、陸前高田、住田の飲食店にも声をかけ、持ち回りで用意してもらいました。

一 企画列車が「いわてさんりく恋列車」につながったんですね。

(佐藤) 「いわてさんりく恋列車」(※2)は、応援隊の岡本花織さん(旧姓:平山)から婚活パーティーをやってみたいと提案があって、列車と婚活を結び付けた婚活列車がひらめいたんです。じゃあ気仙地区に配置されていた応援隊みんなで行こうよとなって3回実施しました。「いわてさんりく恋列車」は岡本さんの功績だと思います。

列車だけでは淋しいということで、恋し浜の公民館でバーベキューをやって、地元の漁師さんにホタテやアワビも出してもらって酒は飲み放題列車で実績のあるメーカーさんに提供して頂きました。

被災地で取材をしていたNHKのディレクターが、偶然にも恋列車のチラシを見る機会があって、私からイベントの説明をしたところ興味を示してくれて、3回目の恋列車に同乗取材させてほしいということになって取材していただき、それが題材になって制作されたのが、NHKのドラマになった「恋の三陸列車コンで行こう!」です。

まさかそんな展開になるとは思いもませんでした。



— 中野さんは、途中から碁石海岸インフォメーションセンターに活動拠点が変わり、三陸ジオパークやみちのくトレイルなど三陸の魅力を伝える活動をされましたね。

(中野) 以前は、大船渡市立体育館近くのプレハブに観光協会の仮設事務所があり、着任当初はそこにいたんですけど、碁石海岸にインフォメーションセンターが新設されるということで、「住んでいる仮設住宅も近いし」ということで、活動拠点が移ることになりました。

施設管理とか事務職はしたことがなかったので、運営も企画も好きにやっていたといいと言われても何をやっていいかわからないし、佐藤さんのような凄いイベントはできないけど、何かやらなきゃと、兄が趣味で燻製づくりをしていたのを思い出して、ネットで検索したら段ボールで作る燻製づくりというのがあって、これやろうと提案したら「じゃあ誰が講師？」ってことで、言い出しっぺの私が付け焼刃でやってみたりして、そうしてやっていくうちに季節ごとに色々チャレンジして、何とか形になっていった感じです。

そうしているうちに、みちのく潮風トレイルが開通したということで、トレイルでイベントやってみようとなったんですが、「道歩くだけで人来るの？」と半信半疑というか 8割型否定的に思っていたんですが、やってみるとポツポツと人が集まってきて、そのうち、トレイルのイベントや整備に駆り出され

たり、だんだん自主的に参加するようになって、今はセクションハイクなんてやるようになりました。今は、本部所属になりましたけど、トレイルが趣味というか結構はまりまして、いずれはお遍路さんや熊野古道みたいな観光資源に、トレイルが育ってくれればいいなと思っています。

そもそも自分から動く方じゃなかったんですが、やらざるを得ない環境に置かれて、ポスターだ商品デザインだってやってみたら、配置先(所属先)の業務にちょうどはまった感じだったのかな。インフォメーションの企画とかも同じで、勝手にやって、運よく喜ばれて良かったということで、お陰様で今があるなと思います。

— 大船渡や陸前高田にこれまで関わってきたお二人ですが、今後について思っていることがあればお聞かせください。

(佐藤) 陸前高田市役所の仕事は、今年度で任期満了となるので、次をどうしようか考えていましたが「働かないという選択肢もあるな」と思い始めたんです。今、陸前高田で大き目の一軒家を借りて住んでいるんですが、ここは自然環境は申し分ないところなのに、それを活かさきれていなくて、外から来た人にできるだけ長く居てもらうためには？と考えたときに、ここだけで頑張るより、高田と大船渡、住田や釜石ともつながればいけないかと思っています。

岩手県、特に沿岸地域は、もともと閉鎖的なところがありました。震災で、外からの支援に対する感謝の思いが人と人をつないで開放的になったんですけど、震災から10年を経過して、またちょっと内向きになりつつあるというのをいろんな面で実感していて、なんとか出来ないかなという思いがあるんです。

私は子供の頃大船渡で過ごしたこともあり、今借りている家の庭木の手入れや雑草取りなんかやって、庭先で近所の方々と話したり、庭の柿や梅の実のおすそ分けとかしているうちに地元自治会にも入れてもらいました。近所のおばちゃんから「あなたに来てもらって良かった。」と言われ、そういう地域のフレンドリーなところが“よそ者”と言われるような人にもっとと伝わるようにできたらなといういろいろと考えているところです。



(中野) 縁があって大船渡に来て 10 年。現在は、観光客誘致拡大国内担当ということで商談に出かける機会も多くて、期待されていることを強く感じています。観光は、すぐには数字に反映されないものと周りからも助言をもらっていますが、すぐには数字に表れなくても、気仙地域にお客さんを少しでも多く引っ張ってこられるよう、自分でもっと頑張っていこうと思います。大船渡を日本だけじゃなく、世界にももっと発信していきたいです。



※1 大船渡市さんま焼き師認定試験(主催:一般社団法人大船渡市観光物産協会)
 “さんまのまち大船渡”を PR し大船渡市ファンの獲得や地域力の強化を図ろうと 2016 年にスタート。毎年 7 月上旬から中旬の 2 日間実施され、初日は実技講習として熟練した技を持つ「師範代」から焼き方のコツを学び、2 日目は筆記試験が行われ、合格者には、後日、認定証と焼き師タオルが贈られる。さんま焼き師に認定されると、大船渡市や同協会が主催する「さんままつり」などで腕をふるうチャンスもある。焼き師タオルは、中野貴之さんが応援隊任期中にデザインしたもの。



※2 いわてさんりく恋列車

2013 年から 2015 年まで、気仙地域で活動する応援隊が中心となり、応援隊配置先や三陸鉄道、地域企業等と連携し共同で企画し、地域経済の活性化、観光資源の活用、若者によるコミュニティ再生によるまちづくりを目的に実施したイベント。同イベントがモデルとなり、2016 年 2 月放送の NHK 特集ドラマ「恋の三陸列車コンで行こう！」が制作され、大船渡市で行われた撮影には、応援隊もエキストラ等で参加した。

大船渡市防災観光交流センター「おおふなぼーと」

(大船渡市大船渡町字茶屋前 7-6)

2018年にオープンし、観光交流・地域づくり・津波伝承・都市間交流等を目的とした大船渡市の交流施設です。

津波発生時等の災害発生時は、一時的な緊急避難場所としての機能も整備されており、現在の施設運営は、元応援隊の中野貴之さんが所属する一般社団法人大船渡市観光物産協会が指定管理者として担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【陸前高田編】



【左】 山本 健太さん(陸前高田市在住)
活動期間:2015年6月1日~2016年12月31日
配置先:陸前高田まちづくり協働センター

【中】 種坂 奈保子さん(陸前高田市在住)
活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日
配置先:陸前高田地域振興株式会社
陸前高田まちづくり協働センター

【右】 佃 実佳さん(陸前高田市在住)
活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日
配置先:陸前高田市仮設住宅連絡会
陸前高田まちづくり協働センター

インタビュー会場:陸前高田市まちなか広場交流施設
「ほんまるの家」

ー 山本さんがちょっと遅れるとのことですので、まずは種坂さん、佃さんの近況をお聞かせください。

(種坂) 応援隊の任期を終え、陸前高田市の復興支援員として、所属はそのまま陸前高田まちづくり協働センターで1年くらいお世話になりました。その後、陸前高田市のまちづくり会社設立に伴い社員として入社し、主に事務局の仕事をして今に至ります。

高田の中心市街地は、かさ上げが完了した7年前から月に1店2店が新規で開店していて、今は100店を超えているんですが、ほとんどが「高田まちなか会」という団体に参加していて、その事務局のサポートやまちなか広場の公園管理やチャレンジショップ等の運営などをやっています。元々私はイベント企画が好きなので、ビアガーデンや映画上映会、古本市のようなイベント運営や、以前からやっていたデザインの仕事やホームページの制作などもやっています。

プライベートでは2018年に結婚して、子どもが生まれて4歳になります。



(佃) 応援隊の活動が終わる前に、保育士の資格を活かして活動できるということで、大船渡の児童養護施設でボランティアをしていたんですが、活動終了後は職員として働かないかと声をかけてもらい、今年で6年目になりました。



施設では2歳から18歳までの子どもたち約30人が暮らしていて、虐待を受けた子や家庭の事情で親と一緒に住めない子とか、家庭環境に恵まれない子どもたちと一緒に過ごしていて、時には親の代わりに参観日や三者面談に行ったり、子ども達からの進路等の相談に乗ったり、施設を出る時には、引っ越しを手伝ったり、家族のように寄り添うようにしています。

一 応援隊に応募した経緯やきっかけは何ですか？

(種坂) 震災の年の2011年11月から、NPO法人ETIC.(東京都)の震災復興リーダー支援「右腕派遣プロジェクト」で、陸前高田未来商店街の事務局で活動していましたが、その後も高田に住みたくて、大船渡市観光物産協会でもわずかな期間ですが仕事をさせてもらい、応援隊に応募しました。

(佃) 私は実家の方でフリーターをしていました。その前は今の仕事と同じ児童養護施設で保育士として働いていて、事情があって辞めたんですが、震災の後しばらくしてネットで東北のことを検索していたら、陸前高田市仮設住宅連絡会のことを知って事務局長さんにメールを送ったら、翌年に、県で応援隊を募集することを教えてくれたので、東北や岩手のことは何もわかりませんでした。応募しました。

一 様々な活動に取り組まれた中で、特に印象に残っていることをお聞かせください。

(種坂) 活動の方向性の違いもあって、途中から配置先が陸前高田まちづくり協働センターに変わりました。協働センターでは「大丈夫？」と感じるくらい自分が思うことをやれる環境を頂いてとても助かりました。

当時は、高田の街なか整備に向けて、このエリアの店主たちとの関係をつくっていくという段階で、いずれはここに集まろうよという話し合いを毎週のようにしていて、そこに参加させてもらっていて、街ができる前から「まちゼミ」というイベントを手伝ったり、「まちなかマップ」を作ったりして、その頃の活動が今につながっています。印象的な出来事というより、あの時そこに関わって今があります。



一 着任当初の配置先でもネット販売を支援し軌道に乗せましたね。

(種坂) 私はモノを売るだけの仕事は向いていないと思いました。

生産者とのコミュニケーションを大切にして、生産者の思いを伝えることをやりたかったんですが、思うようにそれが実現できなかったことが残念でした。ネットショップは、それなりに注文が入るようになって少しは貢献できたのかもしれませんが、軌道に乗せたというレベルではないし、もう少し上のレベルにまで持って行けたんじゃないかなと思います。

でも、仙台でのネットショップの講習会に参加させてもらったのがありがたくて、応援隊でなければ参加できなかったと思います。あの講習会に参加出来たことで東北中に知り合いができて、素晴らしい経営者と出会えて、自分の財産になったと思っています。

応援隊の任期を終えてからも5年を超えて、あの時がどうだったかを思い出すのは難しいですが、いろんなことにチャレンジができて、今思うと濃厚な5年間だったと思います。

一 佃さんも、任期途中で配置先や活動内容が変わるなどいろいろなことがありましたね。

(佃)



応援隊になるきっかけになった陸前高田市仮設住宅連絡会では、仮設支援員との連絡や外部の支援団体との調整をしたり、復興や地域情報の発信ツールとして連絡会通信を発行したりで結構忙しかったですね。連絡会の事務局長が途中で変わったとかいろいろありましたが、連絡会が目的を終え解散となり、陸前高田まちづくり協働活動センターに移ることになりました。

協働センターでは、陸前高田市まちづくりプラットフォームの事務局の活動もあり、仮設連絡会での活動以上に地域支援団体との横のつながりが多くなりました。

(種坂) 私もNPOの活動や仕組みについての知識が増えて、市民活動や地域づくりに対するイメージが変わりました。周囲にも活動している人たちがこんなにいる、いろいろな地域の課題に取り組んでいるんだとすごく勉強になりました。

— 種坂さんは、応援隊時代の活動がそのまま今の仕事につながっているようですが、佃さんはいかがですか？

(佃) 応援隊の頃に知り合った人たちが職場の施設にボランティアで来てくれたり、応援隊仲間の酒井さんも学習ボランティアで月2回来てくれたり、子どもたちの支援ということでクリスマスプレゼントを届けてくれたり、仕事のつながりというより、応援隊の頃の出会いかから人とのつながりが、ずーっと活着ていると感じます。
人と人とのつながりが、養護施設に対する理解の輪の広がりにどんどん結びついているとも思います。

— 陸前高田は、この後どのような街になってもらいたいですか。

(種坂) やっぱり子供ができれば、子供が将来帰ってきたいと思える街にしたいというのはすごく感じます。自分自身も、他のところに住んでみたいと思うことはあったんですが、これだけ長く住んでいると、まちづくりの仕事をしているし、早々気軽に引っ越せるわけでもない。じゃあ自分で面白い街にするしかないと思っていて、創りたい場所は自分で創ればいいと思っていますんです。誰かができないことをブチブチと不満を言うより自分が創るみたい。

動かないと何も進まないの、あとはやるかやらないか、何をしたいかしたくないかだと思んです。自分がやりたいと思ったことをやっている人の集まりですべての街ができていと思うので、何をやりたいかだと思います。他の街を見て羨ましいと思うことは多々ありますが、それは街の誰かが頑張っているから、というのが裏側を知るとそう思えます。



— この先どうするとか、今何か考えていることはありますか？

(佃) 毎年どうしようか迷うんです。コロナが落ち着いて4年ぶりに実家に戻ってとても懐かしかったんですが、まだ当分は岩手に居て子どもたちと過ごすことにしました。新しい子たちはいつからという区切りがなくて、常に見てあげなければならない子もいるので、自分もここを区切りでどうするというのは難しいですね。

(種坂) 佃さんが養護施設で働いていることで接点できて、私は児童養護や里親とか全く無知で遠い世界のことに思っていました、身近に感じられるようになりました。

私は、佃さん経由で施設の存在を知り、そこに様々な事情を抱えた子ども達がいるということを知りました。佃さんがいたから知ることが出来た私みたいな人が他に多いと思います。

(佃) 結構、養護施設は閉鎖的に思われているところがあるんですが、地元の周囲の人たちには昔から理解があって、気軽に声をかけてくれたり、手伝いに来てくれたりします。

養護施設がどういうところなのか知らない人からはクローズに感じるかもしれませんが、繊細な面はあるけれど普通の子供たちが普通に暮らしている施設なんです。

あ、健太さん。
今、健太さんと一緒に子ども食堂やってます。



山本健太さんが
ここから遅れて参加します

一 山本さん、早速ですが近況をお聞かせください。

(山本) 応援隊の活動は2016年の12月末で終わったので、その後は一般社団法人トナリノ(旧:SAVE TAKATA)に所属しています。現在は公私を含め、3つの仕事をしており、①講師業、②トナリノ、③デジタル庁です。



①の講師業は、岩手県立高田高校で総合学習の講師をしており、今日も「時間の使い方」をテーマに、自戒の念も込めて話をしてきたところです。他にも気仙沼市立病院附属看護学校で、看護課情報学を受け持っています。

②のトナリノでは、デジタルチームのマネージャーを担当しており、様々な世代の方々にデジタル機器の操作・活用方法などについて講習会を実施しています。

③のデジタル庁では、自治体と政府職員が利用できるオンラインコミュニティの事務局を担当しています。デジタル利用促進に関わる情報交換の場の提供に加えて、対面の勉強会などを通じて自治体間の横軸連携等を推進しています。自治体によっては直接出向いて、提案や相談等の対応をすることもあります。基本的にテレワークで業務を行っており、地方に居ながら様々な仕事に携わっています。

一 山本さんの着任は、2015年6月ですが、応援隊になるまでの経緯など教えてください。

(山本) 福岡の出身で関西の機械系メーカーで3年働いて「何か違うなあ」と感じていて、そのタイミングで東日本大震災が起こってしまって、なにか役に立てればと思い、ガレキ撤去やサロン活動などで1年間ボランティア活動をしていました。福島と陸前高田、宮古にも入りましたが、落ち着いたのは高田の人達と出会ったからです。商工会の会議の時だと記憶していますが、店主の方が「街ぶっこわれちゃったけど、ここで商売やっていくしかねえからな」って言ったのを聞いて「カッコいい！」って感動しちゃって。「ここで10年居させていただきます。要らないって言われるまでいます！」と決心しました。

ボランティア活動からいろいろな活動を経て、陸前高田まちづくり協働センターで応援隊に出会って、応援隊はやりたいことを続けさせてもらえる機会になったと思っています。感謝していますし、いろんな地域に応援隊や復興支援員の仲間がいて、他の地域のことを知る機会ができて、それまで全く知らなかった行政のことや動きなんかにも触れることができて、いい経験だったと思います。



一 応援隊としての活動期間は1年半ですが、印象に残った経験(活動)は何ですか？

(山本) 被災地域の仮設商店街の連携イベントですかね。復興グルメF1グランプリという名称で行われていますが、震災でダメージを受けた商店の人たちが商店街をつくりました、それが各地にあり、持ち回りで集まって継続して合同のイベントをやったんですが、それをきっかけに、支援している人たちとつながりもできました。

被災沿岸地域って割と一括りにされることってあるじゃないですか。でも、大船渡と高田では違うし、陸前高田でも気仙町と高田町では違うと思っていて、現地に行かないと見えない部分や、資料だけではなく人と会って話さないとわからないことがあります。そのあたりが応援隊の約1年半の活動や経験で学べた部分だと思いますし、その後の仕事にもつながっていると思います。



一 陸前高田が今後こうなって欲しいとか、将来に向けた思いはありますか？

(山本) あんまりないですね。自分で選んだ場所なので、自分として良し悪しひっくるめて楽しんでやろうとは思っていますが、このまちの未来については、高田に生まれた人たちがどのように思っているか、それに依るとは思います。変わってほしいというより、陸前高田の色を出してほしいという思いはあります。

講師業で接する若者からは、自然の流れとして「地元では仕事がないから仙台や東京に行く」みたいなことを毎年聞きます。それが悪いこととは思いませんし、選ぶのは本人の自由です。しかし今はどこにいても仕事はできるし、ここに身体を置いて、どこか国内外の大手企業の仕事をすることも可能な時代です。あとは本人が現状を認識し、判断できる能力を身につけられるよう、大人が支えてあげられるかが勝負だと思います。

「一部のおとなの言うことに振り回されずに自分で調べろ」とは生徒たちにはよく言います。

自分もそうですが「大人は昭和の考え方や働き方が染みついている、そこからどう抜け出すかで頑張っている。現状維持でずっとやり続けるのは90年代で終わっています。明日自分の会社がつぶれると思ってどこでも生きていけるように勉強しなさい。」というのが若者に言いたいことですかね。



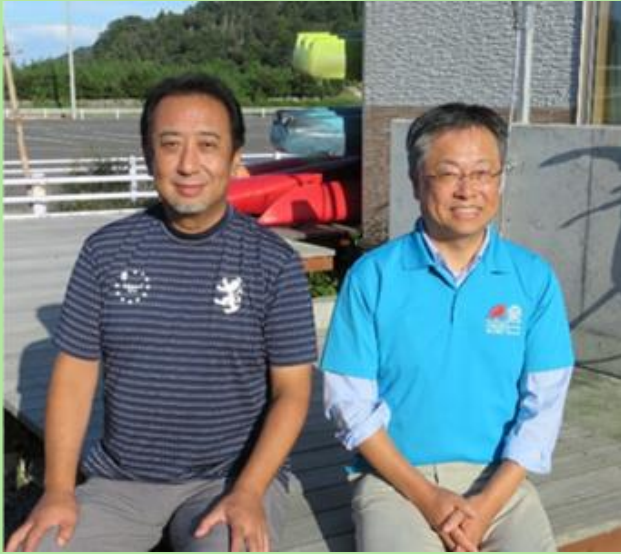
陸前高田市まちなか広場交流施設「ほんまるの家」

(岩手県陸前高田市高田町字大町 106 番地)

2017年10月に陸前高田市中心市街地に完成した公共の広場「まちなか広場」の一角に建つ交流施設です。東京ガス株式会社から陸前高田市に寄贈された世界的建築家の伊東豊雄氏設計のレンタルスペースで、現在の運営は、元応援隊の種坂奈保子さんが所属する陸前高田ほんまる株式会社が市の指定管理者として担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【釜石編】



【左】 菊池 啓さん(釜石市在住)

活動期間:2018年6月8日～2024年3月31日

配置先:県沿岸広域振興局経営企画部産業振興室

【右】 里舘 徹さん(大槌町在住)

活動期間:2019年5月1日～2024年3月31日

配置先:県沿岸広域振興局宮古地域振興センター

インタビュー場所:釜石市・根浜海岸レストハウス

ー 現在は、お二人ともこの根浜海岸レストハウスにお勤めということですが、近況をお聞かせください。

(菊池) 私は2023年4月からお世話になっていますが、勤務がシフト制なので、里舘さんと顔を合わせないことも多いです。仕事は主に施設管理ですが、各種受入れも担当しており、企業研修やワーケーション、インターンや教育旅行の行程を作ったり、受入関係者との調整などで外出する機会も多いですね。

仕事は充実しています。ただ、シフト勤務なので、自分が休みでも世の中は休みじゃなく、スマホに業務連絡が入ることも多く、見ないようにと思うこともあるんですが、やっぱり無理ですもんね。(笑)

(里舘) 私は8月から働き始めました。今の業務は、施設管理だけなので結構すぐに慣れました。出勤が月の半分くらいで、勤務は8時半から4時までなので、気分的にも体力的にも楽です。家も近いですし。

ー 応援隊に応募されたきっかけをお聞かせください？

(里舘) 私はちょうど転職活動の最中で、ハローワークで応援隊募集の求人を目にして、とりあえず面接は受けようと思いました。ジオパークの募集で面接を受けたんですが、面接官がいっぱいいてびっくりしました。募集要項に“復興”というキーワードがあったので、自分も被災体験があり、機会があれば地元の復興に関わりたいという思いがあったので、応募を決める後押しになったのかもしれません。

(菊池) 震災後に釜石にリターンして1年、車庫証明の現地調査を行う仕事に就いていたんですが、転職を考え始めていたタイミングで、ハローワークの相談員の方から、是非お薦めしたい求人があるということで「いわて復興応援隊」の募集と出会いました。応募前に盛岡の公会堂で開催された募集説明会にも足を運んで、応援隊の活動とジオパークというワードも知ることとなりました。面接は、釜石で面接官は3人でした。



一 最も印象深い活動や経験についてお聞きます。里館さんは、三陸ジオパークと縄文遺跡に関するオンラインセミナーを手掛けられましたね。

(里館) もともと配置先で、事業のアイデア出しを求められての提案だったんですが、これはジオでやった方がいいねと言われて、三陸ジオパーク推進協議会を經由してジオ協議会の中部ブロック事務局に相談したら、すぐにやりましょうということになって開催が決まったセミナーなんです。

打合せを重ねる中で北部・南部のブロックも入れようということになり、関係者との調整などで北部は町田さん(久慈市配置)、南部は菊池さん(釜石市配置)にも動いてもらいました。事業費が最初からあってという企画ではないので、中部ブロックをはじめ関係機関との折衝は大変でした。

実施が年度内の2月ということで、年末からの準備でてこ舞いでした。正月を挟み、コロナ禍の影響もあり、開催直前でWEB開催に切り替えたりしながら、八戸市埋蔵文化センター、岩手県立博物館、大船渡市教育委員会にこちらから足を運んで企画を説明し協力をお願いしましたが、すぐには承諾をいただけない機関もあって、かなり難航しました。チラシは、及川理香子さん、当日の運営はジオに関わる隊員4人にプラスして、司会は鷲塚さんをお願いするなど、応援隊仲間の連携でなんとか乗り切りました。



一 菊池さんにとって、特に思い出に残る活動や経験は何ですか？

(菊池) 県の出先機関への配置ということで、正担当は県職員の方という業務が多かった中で、主体的に動けたのはジオパークですかね。県職員は異動も多いので、ある意味で頼りにしていただいた面もあったと思います。そうするとモチベーションも上がりますので、縄文のオンラインセミナーや釜石のジオ祭り(※)みたいなイベントも、応援隊それぞれが役割を分担し、得意分野で力を発揮できたと思います。応援隊活動の最後の方で参加した石川県で開催されたジオパーク全国大会では、凄く熱量を持ったジオに携わる人たちがこんなにいるんだと仲間同士の連帯感を覚えました。

2022年11月に実施した三陸ジオ南部ブロックの首長ツアーは、少し大変だったのですが、とても印象深いですね。

本番1週間ほど前に、行程に見学サイトをもう1か所追加してくれというオーダーがあって、関谷洞窟住居跡をなんとか追加したのですが、直前だったので調整にバタバタでしたね。結果として参加された首長さん達から、高評価を頂いてとても達成感があったことを覚えています。



※三陸ジオパーク～ジオタウン@釜石(2023.1.7～8)

応援隊が中心となって企画・運営を担ったイベント



一 三陸DMOの支援についてはいかがですか？

三陸観光プランナー養成塾には、他の応援隊や協力隊とも一緒に参加されていましたね。

(菊池) 日常の業務では県の観光コーディネーターと組むことが多く、私が組んだ方は、常に様々な企画を考えていらして、勉強になったことも少なくありませんでした。お互いに信頼関係を築けて楽しく活動できたと思います。

三陸観光プランナー養成塾(※)については、観光振興などを担う地域おこし協力隊などの参加が多かったと思いますが、隊員同士でもあまり接点がないこともあり、横の連携を推進する効果があったと思います。活動内容が異なっても地域のためという気持ちは一緒に連帯感が生れる、そこに尽きると思います。養成塾のプログラムには、観光客と地域の生産者や受入側との交流が組み立てられていて、地域の取組みを体験しながら学ぶ機会が多く、とても勉強になりました。



※ 三陸観光プランナー養成塾

三陸DMOセンター(公益財団法人さんりく基金DMO事業部)が主催する観光人材を養成を目的とした実践塾。観光関係者や復興支援員(応援隊ほか)・地域おこし協力隊など観光振興に関わる人達が参加している。

一 応援隊任期中の経験を通して、今のお仕事に活かしていることはありますか？

(里館) 人との繋がりを意識するようになって、地元の大槌でも張頑っている若い人もいっぱいいることがわかりました。この施設(根浜海岸レストハウス)では、利用客から県内の海水浴場とか三陸沿岸の見どころなどについて聞かれることが多いのですが、ジオパークやDMOでジオサイトや名勝、穴場など応援隊の活動で知ることができたので、地図をみせながらアドバイスできていて、めちゃくちゃ今の仕事に活かしています。

宮古市の田老地区で開催している「タロウィン※」は、3年目ですが今年も関わることになりました。応援隊の活動を終わるときに「卒業です。お世話になりました！」と挨拶したはずなんですけど、何故か連絡をいただきました(笑)。これまでジオをイベントの要素に入れて「ブラたろう」とかやっていたんですが、今年は三ジオ協の本部も宮古のジオ協も全国大会があるということで、完全に私一人完全ボランティアで参戦します。大変ですけどこういうつながりが続いていることが嬉しいです。



2021年の「ブラたろう」より



「タロウィン2021」

主催：タロウィン実行委員会

「ブラたろう」

共催：三陸ジオパーク推進協議会

※**タロウィン**：10月のハロウィーンの時に宮古市田老の道の駅たろうで開催されるイベント。「田老(たろう)」と「ハロウィーン」をかけてタロウィンというイベント名となった。同イベントは、宮古市の地域おこし協力隊の発案で地域や道の駅関係者に応援隊も加わった実行委員会の主催で行われており、併催として三陸ジオパークに親しんでもらうための街歩きイベント「ブラたろう」も開催されている。

— 震災から13年になりますが、地域の変化を感じるどころや、今後地域にどうなって欲しいという思いなどありますか？

(里館) 復興に関連づけて言えば、震災前は若い人はほとんど都会へ出ていくとか、地元に残る人は少なかったのが現実で、震災だ復興だということで、三陸に来てそのまま移住された方も結構おられるんですよね。そのような方たちはとても一生懸命に前向きに活動されていて、物凄い人が町に来て、地域に様々な化学反応を起こしているのを感じます。人口減少もあって若い人もかなり減ってきていますが、もっともっと多くの人たちが街づくりに関わってくれば面白いですね。

(菊池) 逆に私は震災前の釜石の事はあまりわかっていないんですよ。高校進学で釜石を離れて下宿生活だったので、中学生だと自転車で行ける範囲しか知らないですし、半島の先端や山間部の集落など、釜石生まれなのにそれまで何も知らなかったんですよね。釜石に戻って最初の年に仕事で市内を隅々まで車で走りまくって調査ことが凄く役になっていて今につながっている気がします。

町のこれからについては、やはり、いっぱい人に来ていただきたいですね。この施設の利用者にアンケートを取ると7割から8割が岩手県内の内陸からのお客さんです。あとは関東圏ですね。観光もそうですけど、企業研修やワークショップで幅広く多くの人に来ていただいて、いっぱいお金を使ってもらいたいです。



根浜海岸観光施設オートキャンプ場「根浜シーサイド」

(岩手県釜石市鶴住居町第21地割23番地1外)

釜石市唯一の海水浴場「根浜海岸」の観光施設です。2019年8月、東日本大震災津波から復興オープンし、キャンプ場や多目的広場が利用でき、管理施設棟のレストハウスは、三陸ジオパークの拠点施設にもなっています。

現在運営は、釜石市の指定管理者として株式会社かまいしDMCが担っています。



いわて復興応援隊インタビュー【住田編】



-左から-

関 博充さん(住田町在住)

活動期間:2015年4月1日~2018年3月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

小向 はるかさん(住田町在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:住田町観光協会

酒井 菜穂子さん(住田町在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年3月31日

配置先:陸前高田まちづくり協働センター

植田 敦代さん(住田町在住)

活動期間:2012年10月1日~2014年9月30日

配置先:住田町観光協会

インタビュー場所:住田町「イコウェルすみた」

— 皆さんの近況をお聞かせください。

(植田) 私は2014年9月で応援隊を卒業していますが、住田町には応援隊着任の2012年10月からずっとお世話になっていて、今は、まちや世田米駅(※1)ので仕事をさせていただいています。一般社団法人SUMICAの副代表をやっているのと、2019年に個人事業主の「おとりもち」というのを登録していて、ここ2・3年は、ワーケーションの受入れやインターンシップのコーディネートをしています。

8月にこの子が生まれて、今はSUMICAで運営する“まちや”の仕事は育休をいただいています。



(小向)

応援隊卒業後もしばらく住田町観光協会で活動を続けていましたが、今は、県立住田高校の魅力化プロジェクト(※2)に携わっています。住田高校は生徒数がかなり少なくなっていて、入学する生徒をもっと呼び込むためにも魅力的な高校にするにはどうするかについて、放課後の充実とか授業の企画とかをお手伝いしています。



(酒井)

今、住田に住んでいます。応援隊を終了して半年くらい空いているんですが、その後、いわて連携復興センター(※3)に所属して、1年後に陸前高田から住田に移りました。応援隊から引き続き、災害公営住宅のコミュニティ支援がメインですが、今の所属先もいろんな事業をやっています、地域づくりの講座やセミナーとかNPOの支援もやっています。住田にたどり着いたのは、あっちゃん(植田さん)とか応援隊時代から住田の人とのつながりがあったからです。高田を離れる寂しさもありましたが、今は住田の暮らしが気に入っています。

一 住田は住みやすいですか？子育てがしやすい環境とかでしょうか？

(酒井) 確かに不思議な魅力があります。

(植田) 特別に子育てしやすいってわけじゃないけど、地域のみんなが子供を見てくれる。

(小向) 温かさはあるね。保育園入りやすいし。

(酒井) 住田は、私が住む前から移住者や応援隊のみんながいて、地域の方との関係など、大分開拓してならしえてくれたので、その恩恵を受けているのだと思います。高田よりもっと人との距離が近いし、高田でもそういう距離感が楽しめていたので、この町のおかげでコロナ禍でも寂しさを感じなかった気がします。



一 関さんは、お仕事が変わられて住田に来られたばかりですね。

(関)



私は応援隊としては、2015年度から3年間、三陸ジオパーク推進協議会(宮古市)に配置されました。その後、宮城県で転職し「みちのく潮風トレイル(※4)」に関わりましたが、2023年5月からは住田町に移住して地域プロジェクトマネージャーとして、この「イコウェルすみた」の管理運営をしています。

岩手県内で仕事を探している時に、この仕事をみつけ応募しました。住田町には応援隊で知った顔もいるし、ジオパークの時に住田町の役場や観光協会をはじめ、町民の方々にはいろいろお世話になっていたのですが、トレイルの時にはルートが住田町にはないため、関われなかったのが何か心に残っていたんですね。

一 では、あらためて皆さんに応援隊で活動することとなったきっかけをお聞きます。

(関) 私の場合は少し特殊です。応援隊になる以前から、三陸ジオパーク推進協議会事務局で活動していました。雇用期間が終了する際に、事務局に復興支援員を配置し運営するということになり、県からの勧めもあり、私は応援隊として引き続き活動することになりました。

(酒井) 2011年3月の震災の時は、海外で活動していたので、東北で震災があったのは知っていましたが、震災の直後には全く支援とかに関われなくて、職場の関係で何か出来るのかなと思っていたのと、地域おこし協力隊も考えていて、全国の地域おこし協力隊のブースが出展するフェアに行ったら、岩手県ブースに1期生のあっちゃん(植田さん)がいて、地域おこしと復興支援両方やっていて「楽しいよ」って言ってたんです(笑)。

確かにそのブースにいたみんなが何か楽しそうで、岩手の地理感が全くなかったんですが、復興支援に関わりたいう思いで応募しました。活動先は、行政側に入るのは嫌だったので、NPOとかの民間を希望しました。

平成25年度いわて復興応援隊員募集
岩手県では現在15名の「復興応援隊員」が震災後の三陸を中心に
元気に活動しています。
あらたに4月から加わる平成25年度隊員の募集が始まります。
三陸の復興と地域の活性化に力を注ぐ志のある方の応募をお待ち
しています。
東京と岩手で復興応援隊のセミナー&募集説明会を開催しますの
で、ご参加ください。

地域を元気にし、
復興を後押しする
人材を求めます！

いわて復興応援隊
セミナー&募集説明会

募集説明会の入場は自由ですが、事前のお申し込みをお勧めします。 電話予約申込みの番号 019-629-5194
メールでお申し込みの場合は 4480007@pref.iwate.jp

盛岡会場 1月19日(土) 東京会場 1月25日(金)

一 応援隊採用面接の東京の会場で「電気や水道はあるんですね？」と聞かれたことを覚えてるんですが。

(酒井) 私もすっごくよく覚えてます！海外青年協力隊で海外では、電気も水道もない状況を経験していたので、質問してしまいました。同じ日本語で言葉が通じるし、電気と水道あるなら何でも大丈夫だろうなって(笑)。

(小向) 私は東京会場での面接でした。当時は今の旦那さんとの結婚を考えていて、そういうことを面接で言ったら採用されないかも迷っていたんですけど、思い切って面接で話したら「それはいいねえ」と言ってくれたのが嬉しくて、とても印象に残っているんです。震災当時は、静岡に住んでいたんですが、東北が大変な時に私ここで何しているんだろうと考えていて、岩手なら実家(青森)の隣だし、これを機に東北に戻ることも自分にとっていいことなのかなと、何かずっとひっかかっていたんです。

(植田) 私は、お二人より前の採用の1期生ですが、面接は銀座のいわて銀河プラザの地下だったと思います。震災の時は、東京で仕事をしていて復興には何も関わらず、当日付き合っていた夫の実家も被災しているのに、特に何か出来たわけでもなくて、大船渡の友人も被災したと聞かされて、「このまま東京で仕事していいのかな?」と考えていました。

2012年のお盆に実家に帰省した時に、新聞で応援隊募集の記事を目にして、応募の締め切りに余裕がなくてバタバタと行動して、今考えると会社に迷惑をかけるような辞め方だったのに、皆さん快く送り出してくれました。



— 皆さん様々な活動をされましたが、特に印象的だったと思える活動や経験をお聞かせください。

(小向) 住田町は夏祭りが大きなイベントで、その運営事務局を観光協会で作るんですが、台風で中止になったことがあって、夏の最大イベントがなくなってしまって子供たちがかわいそうだということで、「とびやっこ夏祭り」という子供向けの小さい夏祭りを企画して事務局で走り回ってやりました。



(植田) え?全然忘れてた(笑)

(小向) 子供達だけでも楽しんでもらえればというので、準備していた物を使って何かやろうということでしたが、町民の方から結構バッシングされたんですよ(笑)。「その地域の人しかいけないじゃないか」とか、「年寄りはどうするんだ」とか。衝撃を受けましたが仕事の難しさを知りました。

(植田) 私は、えーと何かな…あ!アリスの文化祭、それにします(笑)。私が赴任した翌月、今はなくなった下有住小学校が町内で最も大きい仮設住宅団地の隣にあって、小学校を使って地域の文化祭を観光協会の主催でやったんですが、私、イベントの運営とか1回もやった事なくて。そのイベントの背景とか、何を準備しなきゃいけないとか、調整とかで大変でした。

(関) ジオパークは三陸沿岸広域で仕事をするので、各地にいる隊員と一緒に何かしら仕事が出来たというのが面白かったなと思います。植田さん、小向さん以外にも、田野畑村の悦ちゃん(渡邊悦子/田野畑村配置)とか、中野さん(大船渡市配置)、野田村や洋野町では、町田さん(野田村、久慈市配置)とやったかな?その他にも、各地にいる人たちとなんかやろうと仕事が出来たのが印象に残っています。

後々、応援隊の交流会とかのタイミングで、一人で配置されている応援隊だと悶々としてしまう、というような話も隊員から聞いていたので、気晴らしになったらいいかなと思うことがあって、外の空気を吸うじゃないけど「こっち手伝ってみない?」みたいな感じの話は何回かしたと思います。

(酒井) 私は何かを作り出すという仕事は全くしていなくて、応援隊として協働センターに入った時にワークショップとかグループでの話し合いをまわすとか、人に意見を促すとかファシリテーターを、ちゃんと意識してやるというのは実は初めてでした。それがあったからこそ今につながっています。

— 応援隊で経験したことが、現在の仕事に活かせていると思いますか？

(植田) もうそれは、それしかない気がしますけど。

(小向) 外から来ているからこそ、不満に思うところや、なんか違うんじゃないかみたいな話とかは出来ると思います。当時、地域の大人たちが一生懸命動く姿に感動して、子供達や地域の活性化の為に活動している人達と関わりが出来て、自分はどうお手伝い出来るかとか、どのような仕組みがあればやりやすくなるのかとか、今の仕事にも通じていると思っています。コーディネーターという仕事は、思いを思いだけに終わらせないようにすることだと思いました。

民泊事業の事務局もやっていたので、地元を一軒一軒まわったのが本当に凄い経験になりました。身近に農家さんがいなかったで、地元の農家の方や地域の皆さんと繋がりが出来て、この人はこういう考え方をしている、こんなところこそ一所懸命になるんだ、というようなことを知ったのも良い経験だと思います。

— 関さんも応援隊の仲間たちとのつながりが、これからも大切になりそうですね？

(関) はい。実際に、植田さんがやっている「おとりもち」さんの仕事とどのような連携ができるかを考えています。イコウェルに関東や関西圏の企業を連れてくるのが仕事なので、単にオフィスとして使ってもらっただけじゃなくて、住田町にすればプラスαこれが出来ます的な営業をしていかないと、多分、勝筋が見えてこないと思っています。

それと、小向さんがやっていた民泊事業も、営業コンテンツとして活用させてもらうとか、今後も応援隊の繋がりを活用して、住田町の未来につながるような仕事をしていきたいと思っています。



— 酒井さんは、これまでの繋がりを活かせるお立場でもありますか？

(酒井)



今、私の肩書は地域コーディネーターなんですが、コーディネートスキルは全部応援隊の時の協働センターに始まり、そこから積み重なってきたと思っています。応援隊同士のネットワークは、毎日会えなくても、気軽に「ちょっと」と言えたりとか、そういう関係なのかなと思います。

私は東京に楽に日帰りできる神奈川県で育って、日本社会全体の地方と首都圏の関係性とか、東京集中に腹が立つこととか岩手に来て初めて思ったんです。

海外にいた時に、日本ってこうだよって話してきたこととは、良い意味で違う東北を見ることで、日本がこんなに多様だったと思えたのも岩手に来てからなんです。それが今の生活が好きっていうところに繋がるんですが、応援隊という入口をもらって岩手に来られたことで、地域社会の問題とか社会の課題に関心が向いてきて、視野が広がったなという感じがします。

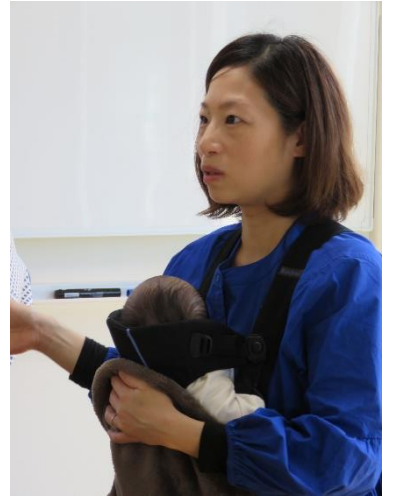
— 酒井さん、ご実家は小田原ですよね。生活の拠点として住田との違いを感じますか？

(酒井) 小田原では地域との関係性がそんなに近いわけじゃなかったんです。私はまだ岩手に根付いたとは言い切れませんが、こっちに来た時にご近所との距離感とか、地域の事を教えてくれる人がいるとか、感覚が多分私に合っていたんだと思います。元々は、自分は仕事と生活の人のつながりを分けるタイプだったんですが、こっちに来たらそれは無理で、それが安心安全な生活なのかなとも思うんです。

一 岩手県内でも地域おこし協力隊の活動が増えてきましたが、協力隊と仕事等に関わることも多いですか？

(植田) そもそもほとんど関わっていないですね。今、住田に協力隊は居ないこともあるけど、協力隊だから関わっているとかが、NPOだから関わっているみたいな見方はしないかな。ただ、新しい人が来た時は、自分の時も地域の人を受け入れてくれたという思いがあるので、出来るだけその地域の人に紹介するとか、その程度伝えたりする存在になれたら良いのかなとは思っています。

(酒井) 協力隊というより移住してきたひとりとして見ているんだと思います。私も住田に来て色々な人に繋いでもらったし、自分も新しく来た人と地域をつなぐ立場になればいいなと思います。肩書が協力隊とか、応援隊というのは地域にとってはあまり関係なくて、応援隊というより、配置された団体の誰ということで見られていたのかなという気がします。



(関) 岩手県でも協力隊ネットワークができたのはいいと思いますが、酒井さんが言ったとおり、必要な時に繋がるのであって、必要性がないのに何かと繋がらなきゃいけないって言うのは、それはそれでストレスにもなるかもしれないし。協力隊だけのネットワークプラス、その周辺の関係者も加われるように拡がるといいんじゃないかと思います。

一 最後に、皆さんが関わってきた地域や岩手に対して、期待することや今の思いをお聞かせください。

(関) 地域にかかわればかわるほど、課題がたくさん見えてきて、おいそれとそういうこと言っちゃいけないように思っています(笑)。みんながハッピーな地域になれば一番いいと思いますが、自分たちが楽しんで活動していないと人は来ないし集まらないので、自分が楽しみながら、その笑顔を誰かに見てもらう機会を増やしていくことが大切だと思います。

(酒井) 子どもが将来に夢を持てる・描ける地域であって欲しいと思っていて、震災後しばらくしてコロナが来て、なかなか希望が持てる時代じゃなかったのだから、この先、子どもたちが大きくなったら楽しいとか世界が開けるみたいな、単純なことかもしれないけど語れるようなればいいなと思っています。

私たち大人は、例えば地域で職業を教える機会が少ないのであればつくるとか、岩手県全体でというのは難しいかもしれませんが、住田みたいな地域なら可能かなと思います。



(植田) 確かに楽しいと思えていないと人にお薦めできないですよ。自分が10年以上住田にお世話になっていて、いろんな素敵な人に出会えたり、素敵な場所に行ったりしたので、多くの人にわかってもらえる機会を、自分が楽しみながら作れたらいいなと思います。

子供のことについても、子供たちが誇りに思えるようなことや楽しいと思えること、仕事の選択肢や歩み方の選択肢もそうですが、都会と格差なく選べて体験でき場所になればいいですよ。

(小向) 前提として、親が子供たちに将来を選ばせてあげる環境を用意することが必要だと思っていて、沿岸の場合、将来を選ばせてあげられない状況に子供を置いていることが、進学とかを見ていると課題かなと思っています。子供たちが自由に選べる状態で、それでも地域に戻りたいと思うのは、その子のタイプだということ、双子を育てていて思います。

片方は淋しがり屋で、夜は明るいのが好きとか賑やかなことをしてみたいと言うし、もう片方は地域の人と一緒に居ることが楽しくて、お年寄りと話するのが楽しいって言うんです。自分が大切にされた思いが残っていれば、将来は育てられた地域に戻って来るんじゃないかと思っています。



(関) 住田町って面白いよね、人が。

(植田) そうそう、結構面白い！

(酒井) どの人にもドラマがあって、その人生にちょっと入り込めるのが住田の面白さかもしれない。

(小向) うちの子、学校帰りに近所のおばあちゃんの家によって、たまにお茶っこしてくるみたいで、おばあちゃんが今日はどうしたとか、こんなこと教えてくれたとか、すごく楽しそうに聞かせてくれるんです。親としてはちゃんと挨拶しておかなきゃと(笑)。

(小向)

地方の良さというのは人の優しさで、人口が少ないからこそ、一人一人を大事にして長所や短所を認めてくれて、暖かく見守ってくれると感じます。人のことを他人事としてほっとけない優しいお節介焼きがいっぱいて、普段はそうでもないけど、困っている時に「大丈夫か？」って言うってくれる人がいるのが岩手なんだろうなと思っています。



※1 まちや世田米駅

古い商家をリノベーションし、レストランを併設した住田町の住民交流拠点施設として 2016 年 4 月にオープンした。施設の管理運営は、町の指定管理者である一般社団法人 SUMICA がおこなっており、植田敦代さんは同法人副代表を務める。

※2 岩手県立住田高校魅力化プロジェクト

「ひとりひとりの個性を大事にする教育」を掲げ、高校生が挑戦できる環境づくり、地域内外との出会いづくり、同校の目玉授業「地域創造学」の充実をはかりながら、同高の魅力を高め発信するプロジェクト。小向はるかさんは教育コーディネーターとして活躍中。

※3 NPO 法人いわて連携復興センター

東日本大震災発災後の 2011 年 4 月 28 日に県内の中間支援団体が協働で設立した NPO 法人。岩手県沿岸の被災地域をはじめ県内全域での復興を目標とし活動を行っている団体。酒井菜穂子さんは、コミュニティ担当の地域コーディネーターとして活躍中。

※4 みちのく潮風トレイル

青森県八戸市から福島県相馬市までの太平洋沿岸をつなぐ全長 1000km を超えるロングトレイル。関博充さんは、2018 年から 2023 年 3 月まで同トレイル全線の管理運営を行う「みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター」の指定管理団体 NPO 法人みちのくトレイルクラブの事務局長として活躍。

仕事と学びの複合施設「イコウェルすみた」

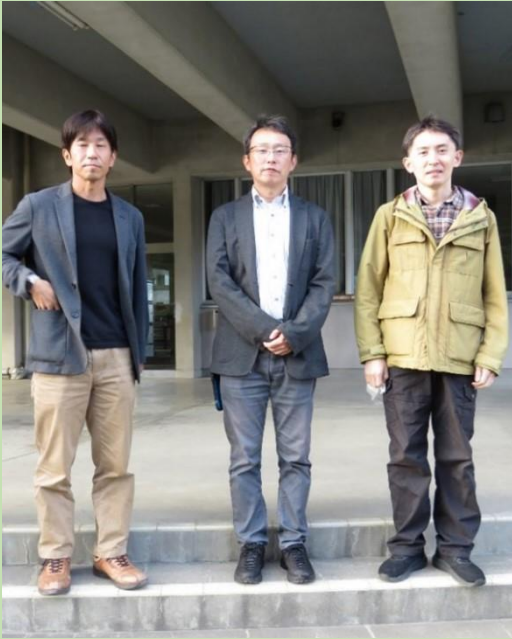
(岩手県気仙郡住田町世田米字本町 31 番地 2)

東日本大震災発災後まもなく、沿岸部の被災者を受け入れるために住田町内の 3 地区に応急仮設住宅を整備。同町独自の木造一戸建ての仮設住宅は、「住田型」として注目され、入居者全員が退去完了した 2020 年 4 月以降、跡地利活用と部材再利用により、17 戸の仮設住宅があった本町団地に同施設が整備されました。

震災の記憶や記録の継承と、町内外の多種多様な企業・個人の交流の場として利用を推進する町の公共施設です。



いわて復興応援隊インタビュー【洋野編】



【左】

町田 恵太郎さん(東京都清瀬市在住)
活動期間:2012年10月1日~2017年9月30日
2018年5月21日~2023年3月31日
配置先:野田村役場、NPO 法人久慈広域観光協議会、
いわて定住・交流促進連絡協議会久慈事務所

【中】

寺田 英人さん(青森県階上町在住)
活動期間:2012年10月1日~2017年9月30日
配置先:軽米町役場

【右】

田高 正博さん(岩手県久慈市出身)
活動期間:2018年10月1日~2021年3月31日
配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局
いわて定住・交流促進連絡協議会久慈事務所

インタビュー場所:洋野町にぎわい創造交流施設「ヒロノット」

— まずは、皆さんの近況からお聞きします。

(町田) 今年3月に活動を終わってから、住まいは東京ですが岩手に何度も来ています。4月に三陸ジオパーク認定ガイドに登録して、8月に宮古市の三陸ジオパークフェスタに認定ガイドとして参加し、先日は三陸ジオパークのイベントを久慈市の麦生漁港で実施したところです。応援隊時代もジオパーク関係のイベント企画はしていましたが、今は、応援隊時代にちょっとやり残したなあということをやっている感じもあります。他には三陸沿岸の特産品を東京や首都圏で、知り合いと一緒に物販などのイベントを企画したりしています。



(寺田) 私は、応援隊の活動終了後は、二戸地域雇用創造協議会で観光振興の仕事に携わりました。その後、現在は洋野町の地域おこし協力隊にて活動しています。主な活動内容は、三陸ジオパーク認定ガイドの資格を取り、トレイルの案内等や、北三陸ベースでは、コミュニティスペースとしてイベントの運営等をおこなっています。

【北三陸ベース】 寺田さんが協力隊の活動として運営する自然観光推進事業のヒロノット内拠点スペース。

(田高) 私は退任後、応援隊活動中から関わってきた宮古市の三陸ジオパークガイドブックの編集作業に携わりました。三陸ジオパークのガイド活動としては、八戸市の潮風アウトドアガイド協会に所属して、種差海岸の普及啓発活動ができたと思っています。

八戸市は市民活動にオープンな風潮があり、そういった環境からかガイド活動に関心がある方も多く、種差海岸だけでも複数の活動団体があるんです。

【宮古市三陸ジオパークガイドブック】

2022年3月に宮古市三陸ジオパーク推進協議会が発行。学術アドバイザーとして田高さんが編集に関わった。



— あらためて応援隊を志すきっかけについてお聞きます。

(町田) 大震災の直後、当時は東京に居て、仕事を探していたということもあって何かをしたいという思いはありました。東京に居るより、現地状況を自分で見たいという気持ちが湧いてきたのと、当時父が福島県相馬市に居たのですが、復興応援隊募集の新聞記事が目に入って、応募する心する決心をしました。特に希望する地域はなかったんですが、たまたま面接のときに野田村の方がおられて、選んでいただきました。被災地であればどこでも良かったので、県北地域であることに特に抵抗とかはありませんでした。

(寺田)

震災の時は二戸市で観光振興の仕事をしていたのですが、二戸市は野田村と協定を結んでいたことで現地に行った際には、現地の状況を見てとても驚きました。また二戸市でも、IGRや新幹線も止まり、観光振興どころでないという雰囲気でした。しばらくしていわて復興応援隊募集の情報を知り、役に立ちたいと思って応募しました。



— 田高さんは、当時久慈市で仕事をされていて、津波を経験されましたね。

(田高)

当時、海岸の近くで仕事をしていたんですが、海なりを耳にして、津波がダアーと押し寄せて、そんなすごい光景を目にしていました。その後は、避難所のお手伝いや支援物資を避難所に運ぶ毎日でした。

応募の動機となったのは、三陸ジオパークが条件付きの再認定となってから、市町村の活動が停滞気味になっていたことが残念だと感じ、今度は自分が直接関わりたいと思ったからです。三陸ジオパーク認定ガイド1期生ということもありますが、認定ガイドになる前からそういった活動をしていたので、ジオを起点にできればとは思っていました。ジオは観光、教育、地域づくりに活かせるとても汎用性が広いツールなので、そこを起点にしてという思いがありました。

— 今振り返って特に印象に残った活動や経験はどのようなことですか？

(町田)

着任後すぐに仮設住宅に入居したんですが、その住民の方々と話げできたのが大きかったですね。一緒に飲んだり、一緒に時間を過ごすということは、普通は経験できないことなので貴重な経験でした。行政の方からこれをやってほしいということも確かに業務かもしれませんが、地域の方々と直接話をするのが、被災地に来た目的のひとつでしたので、仮設での生活は思い出に残ります。

先日も住田町の見学用の仮設住宅を見てきて、地域による特徴を実感しましたし、自分の経験を踏まえながら地域の説明する際にも役立っています。

(田高)

三陸ジオパークの活動として共通のキーワードとなるのは、見えないものを見えるような形にするサービスだということだと思います。具体的には、普代村のたたら製鉄の実験や宮古市のジオパークガイドブックですが、たたら製鉄は実験としては成功したものの、残念ながら村の体験メニューにはなりません。宮古のガイドブックは、その編集過程で、旧川井村エリアで、ジオの視点で何かできないだろうかということで、宮古街道を取り上げることになったんです。その延長で、宮古市地域おこし協力隊OBの松下さんによって、宮古と盛岡を結ぶツアー企画など観光商品開発につながりました。



【たたら製鉄】久慈地域は日本有数の砂鉄の産地で、普代村荻牛地区割沢には、かつてここには南部藩直轄の割沢鉄山があり、「たたら製鉄」により江戸時代には年間400トンの鉄が生産されていた。現在は、割沢鉄山跡は三陸ジオパークのジオサイトに登録されている。

一 寺田さんは、如何ですか？軽米町特産の「サルナシ」の新商品開発などの課題に取り組んでいましたね？

(寺田) 1年目は軽米町産業開発の配置で、2年目に役場の方に配置転換となりました。特産品の商品開発や物産関係のイベントや町の情報発信がメインでした。銀河プラザにも特産品の販売支援やキャンペーンで伺った際には、お客様から美味しかったとか、応援していますとか、暖かい声をかけていただいた事がとても印象に残っています。

「サルナシ」は生食では長くは保存できないので、ジュースが主な商品なんですけど、今では産直で様々な加工品が並んでいるようです。新商品開発の成功例は専門家でも100に一つと言われるなかで、素人が数年で答えを出すというのは無謀かもしれません。また専業で栽培すればそれなりの生産量にはなるのですが、主力商品の片手間で栽培を続けているような場合は、生産量は下がりますし、なかなか難しいですよ。

【サルナシ】

コクワとかコガとも言われキウウイフルーツを小さくしたような果実。岩手では県北の軽米町が特産品として栽培し、ドリンクやジャムに加工されている。



一 任期中の取組は、地域につながる事が出来たと思いますか？

(町田)



自分が居なくなった後も定着させる必要性は当然感じていて、自走することが必要だと思います。野田村玉川漁港の例もその一つで、当初の企画運営に自分も関わり、三陸DMOセンターの観光プランナー養成塾のプログラムから始まりました。今は村の予算で継続していますが、地域として続けていくための仕組みづくりは必要だと思います。

私は久慈事務所で活動して、宮古市や山田町、県北エリアの地域おこし協力隊の方々とは任期終了後もつながりがありますが、いろんな形で様々な地域でいろんな人たちと関係をつくりながら、地方で化学反応を次々に起こしていけるのではないかと期待しています。

(寺田) 地域に残したという点では、宮本慶子さん(洋野町配置)が取り組んだ洋野エモーションが顕著だと思います。また、

エモーションの光景をイラストで表現しポストカードにもなっています。自分もたまの休みの日には一緒に旗を振っていますが、それぞれの都合で地域を離れることになっても、形があるなしかわからず、残したものが地域の人に繋がるのが重要だと思います。

【洋野エモーション】 応援隊が地元の高校教師から「東北エモーションの列車が通る時、高校生と南部もぐりの格好で立つ」と聞き、大漁旗を振り乗客を歓迎することを思いつき、地域を巻き込む活動となった。



一 活動で縁があった地域や三陸の今後について、希望や期待があればお聞かせください？

(田高)

岩手には水産や観光、教育にしても見えていない資源がたくさんあって、それらがジオとか復興国立公園といった枠組みによって見える形になっていることが多いと思いますが、私は、いずれこの枠組みがなくなってもいいかなとも思っています。チャグチャグ馬コや南部鉄器などは、地域に根付いていたものが発展してPRに力を入れたことで有名になったと思います。四国のお遍路さんのように、誰もが知る地域の誇りとして育てていければと思っています。

(町田) 私は、子供たちにジオパークの難しい話はしません。
何故それがその地域にあるのか、どうしてその景勝地ができたのかを少し深堀して、地形や自然環境、生態系があり、その上に人の生業があるというストーリーについて話をするだけでも聞いてくれる子供たちの目が全然違うんです。

地元の方は、ここには何もないと口にしますが、私にすればあり過ぎていて、逆に東京は人工の建造物ばかりで、ビルにしても特に深いストーリーがあるとは思えないんです。

自分もジオパークを知って、そのような見方があると気づきましたが、多くの人に気づいて欲しいと思います。そう考えると、自治体の区分ではないですね。

特産品に関してもそうですけれど、全体的に広がっていくべきものだと思いますし、そういうことをみんなに知ってもらいたいという気持ちはあります。

自分のテーマでもあるんですが、生産者は単にモノを作っているだけではなく、環境問題も意識している。例えば、磯焼け問題対策のため、ウニを間引きして冬に出荷したり、木炭も森林の保全を考えながら作っている。そのような地域の生産者の取組みや思いも併せて伝えたいと思っています。



(寺田) これまでの経験が、その後のどの仕事でも参考になっていると思います。

私の仕事は、いずれも観光振興が柱になっているのですが、先ほどの枠組みの話で言えば、敢えて枠を通して見ることも必要かなと思っていて、例えば大野にある「ひろのまきば天文台」は、星空がきれいに見えるということでも有名ですが、何故きれいに見えるのかということも、地形的地理的な背景を説明することで理解が深まることもある



わけで、単純にきれいだと感動するだけでなく、敢えて見る枠組みを通して説明することも必要かと思っています。

先の震災では、幸いにも南に比べて北部は被害の程度が低かったのですが、洋野町の地域おこし協力隊がやっている街歩きでは、神社が津波の恐れが少ない場所に建立されていることなど、防災の意識付けになる説明も心掛けており、今後発生する可能性が大きい日本海溝海底地震等を意識し、北三陸エリアの皆さんにも、また岩手を訪れる皆さんにも伝える仕事をしていければと思います。

洋野町にぎわい創造交流施設「ヒロノット」(岩手県九戸郡洋野町種市7-116-21)

2020年に閉校となった旧宿戸中学校の校舎を利活用し、2021年11月にオープンした複合施設で、コワーキングスペースやサテライトオフィスのほか、管理宿泊施設が整備されています。

元応援隊の寺田さんが現在の協力隊の活動として運営する「北三陸ベース」はこの施設内に拠点があります。

